

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-7

時間は午前に差し掛かって、月曜日を迎えていた。

「今日はスケジュールがタイトなんだ。支店長に長野に行ってもらうには、今のうちにもう少し情報を集めておきたいからね」と辰巳は言って、メモ書き用に2階ロビーのコーナーサイドボードに常備してあるホテルのレターヘッド付き書簡用紙を手もとに置いて、内ポケットからモンブランのボールペンを取り出した。

「早い話、妙手と言うよりは最後の手段になってしまうが、M&Aを行う。つまり合併か買収の二者択一のどちらかしかないと思うんだ。但し、そうすることが我が社にとっても成長戦略の一環として成立するかを見極めなければならないんだ。それは分かるかな？」

「それが支店長さんを行かせる理由ですね」

「さすが、銀座一流クラブのオーナーママは話が早い。その指し手でいいのかな？」

「荒手の手段としてM&Aについては、私も考えたことはあります。甘えついでお聞きしますが、そこをなんとかソフトランディングさせる道はないのでしょうか」と真紀は辰巳の言ったことを素早く頭の中で整理してから訊いた。

「荒手の手段とは名訳だね」と辰巳は苦笑してから、続けて「しかしソフトランディングさせるとなると、A Iに excellent move を託すしかないかもしれないね」と冗談交じりに言った。

そこにバーテンダーが一言添えてグラスを下げに来たので、「手を煩わせてすまなかったね」と辰巳は礼を述べて、さり気なくチップを渡した。

バーテンダーが行ってしまうと、「バーはクローズしたようだが、このままお開きにはできないね」と辰巳は腕時計を見ながら欠伸を噛み殺して言った。

「よろしいのでしょうか？」と真紀は切り上げられないでいる自身をもどかしく思いつつも、厚意に甘える言い回しをした。

「現状だといつ銀行管理下に置かれてもおかしくないんだからね。そうなつたら、津波のように地域の噂に飲み込まれてしまうんだ。荒療治だろうが、それだけは避けないといけない。貴女は女杜氏との約束を果たしたいから、私に連絡してきたんじゃないのかね。善は急げだ、こうなったからには私も後戻りできやしない」と辰巳はボールペンをカチカチ鳴らして言った。

「ありがとうございます」

「貴女の頼みとあっては、ひと肌脱ぐしかないじゃないか！」

「そう言えば、女杜氏の麻里子さんがくれた手紙のことで、気になっていたことがあります」と真紀はふと大事な探し物を見つけたように言った。